

---

# 黒きナイト

悠夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒きナイト

### 【Nコード】

N1859Z

### 【作者名】

悠夢

### 【あらすじ】

アルバス王国。そこには魔法、妖精なんでもある。

この国に住んでいる皇女 アリアンティア。

国から外れ山々に囲まれた村に住んでいる少年 クレイア。

秘密を持った二人の物語。

パーティー2日前 少年少女の日常 (前書き)

始めて書きました。どうか暖かい目で読んでください。

## パーティー2日前 少年少女の日常

青い空。緑が生い茂る草原。透き通った川。しかし、ここはみんなが知る世界ではない。

この世界には妖精もいれば喋る木々もいるし竜だっている。そして魔法もある。

国の中心都市 アルバス王国から東側に位置する場所。そこに小さな村がある。山々に囲まれており辺りには生い茂る草花が咲きはなっている。

周りの家は木材で建てられた山小屋風の家が幾つも建っている。ここに1人の少年が暮らしている。黒髪黒瞳、名前はクレイア。十六歳の少年で腰には剣が吊されている。

「フウ…。今日はこんなもんか」

クレイアが目差すは木造の家。扉を開け

「ただいま〜っと」

誰もいない家に挨拶をする。ただただ、少年の声だけが寂しく響く。

トレードマークの赤いマフラーを外し、扉の近くに剣帯から吊り下げた剣を壁に立て掛ける。

部屋に置かれた机に晩御飯の魚を置く。背中にあるカゴは床に下ろす。中にはやはり晩御飯のおかずと思われる野菜などが入っている。

クレイアは1人でここに住んでいる。別に家族が亡くなったとかそういう話ではなく。ワケあって離れて暮らしている。

クレイアの家族はクレイアを入れて四人。父、母、一つ下の妹の四人家族。

クレイアの他の家族は城下街に宿屋を経営してしる。クレイアが家を出るまでは結構、繁盛していたので潰れてはいないだろう。

「さて、晩御飯の準備でもするか」  
そう言って台所へと向かう。

晩御飯を作り終わる。今日のメニューはサラダ、焼き魚、パン、  
野菜スープ。

「いただきます」

手を合わせて、食べ始める。  
すると、

トントント

「ん？誰だろ？」

扉を叩く音が聞こえ箸を置く。

扉を開けると

「こんばんは。クレイアちゃん」

ふくよかなおばさんが鍋を両手の取っ手を持ち立っていた。

「ローザおばさん。どうしたんですか？」

そうこの女性はローザさんこの村の村長さんの奥さん。

「食事中にごめんね。煮物作り過ぎちゃってね。おすそ分け」  
「本当ですか？いつもすいません」

クレイアがこっちに着てから何度かおすそ分けを貰っているとても優しいおばさんである。ローザにもクレイアと同じ年の息子 マリクがいる。

そのマリクも一人暮らしをしているからクレイアの両親の気持ち  
が分かるのだろう。

「いいのいいの。逆にこっちが助かってるくらいだから」

「本当ですか？なら遠慮なく頂きます」

「うん。クレイアちゃんも私の息子みたいなものだから。それに  
まだ十六歳でしょう？ならまだまだ食べなくちゃ。育ち盛りなんだ  
から、ね」

「ありがとうございます。おばさんの料理いつも美味しいです」

「ふふふつ、ありがとう。あつと、いけない。食事中だったね。それじゃあ、何かあったら言っつてね」

会話を終えそそくさと、我が家へと帰って行く。

「おばさんも大変なのに俺のことまで気遣ってくれて悪いな。今度、家の方でも手伝いに行こつかな」

ローザの…村長さんの家族は全員で九人家族である。

村長さんのルドルフ、奥さんのローザ、ルドルフの父、母、長男のマリク。今は城の騎士のため城の方にいる。

長女。三男、四男の双子。最後に次女。まだ、二歳だ。

大変そうだけど、とつても賑やかで笑いが堪えないで他人が見ても幸せそうな家族だ。

クレイアにもかけがえのない家族はある。・・・けど・・・今は帰れない。寂しくても今はここにいなければならない。

クレイアはローザから貰ったおすそ分けを抱えて食事の席へと戻った。

埃は一つなく清潔感が溢れている部屋。家具やタンスなどもどれも高級感が醸し出されていて一般市民には到底手が出せない代物ものばかりだ。

コンコンコンッ

規則正しいノックが聞こえ

「アリアンティア様、おはようございます。お目覚めですか？朝食の準備が整いました」

そして、天蓋付きのベットで一人の少女が目を覚ます。

「んっん~~~~ん」

と、伸びをする。まだ頭がぼーっとしている。

ここは皇女 アリアンティア・グラディウスの一室である。

「アリアンティア様?・・・」

呼び声が聞こえない為、侍女がもう一度声をかける。

「あつ、はい！起きています。どうぞ」

侍女の声で頭のモヤモヤを無理矢理取り払う。

侍女が皇女の部屋に入り一礼した後

「おはようございます、皇女様。早速ですがお着替えのお手伝いをさせていただきます」

「はい。お願いします」 その言葉を待っていたとばかりに部屋の外にで待機していたもう三人の侍女が入ってきて着替えが始まる。髪をとかす者。その髪は金色で汚れけが一つない。

それは持ち主の心をそのまま写しているようで美しくさ純粹さ兼ね備えている。

そして、ドレスを着せる者。薄くだが化粧をしてくれる者。

侍女四人はそれぞれ役割があるようで手慣れた感じで進めていく。

長テーブルに何十個も置かれたイス。大会議室とも思われる大きな部屋。

ここは食事をする場所。

そこにはすでにこの国の王と王女がイスに座って娘の起床と朝食を待ちながら夫婦の話をしている。

「アリアまだ起きないのか?」

貫禄のある力強い声。

「あなた、そう焦らないで。あの子は朝が弱いものだからもう少し待って」

優しさが滲み出る声。この国の民を癒してくれる音色。そしてなにより愛も感じられる。

「しかしだな、エリザベス。娘とゆっくり会話ができる時間なのだ。それを削りたくはないのだ。それに二日後にはアリアの誕生日パーティーがあるのだ。それにそれに・・・」

王も人。何より娘が大事で親バカなほどである。

「分かりましたから、落ち着いてください。はあく。焦らなくてもあの子は来ますから」

そうしているうちに

「おはようございます。お父様、お母様」

二人の両親は振り返る。

そこにはあたかも今起きたばかりの寝ぼすけ美少女・・・ではなく紛れも無くこの国の王と王女の娘　アリアンティア・グラディウス皇女がそこに光臨した。

父親と母親が待つ席へと急ぐがそのバタバタした走りが少し高貴さを下げているきもする。

「おはよう、アリア」

待ち望んだ娘が来て満面の笑みの父親。

「おはようございます、アリア。今日も遅かったわね。夜更かしでもしていたの？」

柔らかいすべてを包み込む笑みの母親。

「えへへっ、ごめんなさい。お母様」

凶星をつかれ苦笑いで答える。

「勉強でもしていたのか？」

「この子が勉強する訳無いでしょ。それよりも朝食にしましょう」

「お母様ひとつどーい」

笑いが起こる。王も女王もあるうことがメイドたちも。

「もう。みんなひどいよ！」

膨れるアリア。その顔もとてもかわいらしい。

メイドの笑いもとくに気にした様子はない。メイドに対しても友達並に仲良くしているのだろう。

「わっはっはっは、やはりアリアといると笑いが絶えないな」

「うふふっ。それよりもユーリ、食事を」　笑いが残るなか食事の準備を促す女王。



朝から嫌な雰囲気にはしたくなかった。言う前から分かっていた。だから、言わなかった。言えなかった。

(本当に叶うなら叶えてほしい。わたしが本当に欲しいものは……)

それは彼女が願った一つの願い。その願いが叶うことはこれから先あるのだろうか。

その後、家庭教師による勉強と魔法の授業を受けた。

昼食を終えた後、アリアは父である王の元へ来ていた。

アリアは王の自室まできてノックの後

「誰だね」

「わたしです。アリアンティアです。お父様、今大丈夫ですか？」

「アリアか。大丈夫だぞ。お前ならいつでも大歓迎だぞ」

承諾を得、中へと入る。王の机には書類が山積みになっている。

「それでどうした」

「お父様にお願いがありましてここに参りました」

王はドキッとした。今朝のおねだりもある。しかし、聞いてみないことにはわからない。

「そ、それで何かな？お願いとは」

「えつと、ですね。午後には城下街の方にお出かけしたいのですけど、いい？」

「城下街に？……あ、またロイドの所か？」

「うん、そう。」

「そうか。たまには生き抜きも必要だな。いいぞ、行ってきなさい。……そうだ、ついでにパーティーの招待状も渡してくれないか？」

「うん、わかった。それじゃあ準備してくるね」

その言葉を最後にものすごい素早さで行った。

「やれやれ」

と、悲しげに呟く。あの子にはこれぐらいでしか罪滅ぼしがない。ならこれぐらいなら許してあげよう。

そんな王の思いと眩きだけが残った。

アリアは急いで部屋に戻りワンピースへと着替え城門へと向かった。

城門前には見慣れた少年が立っていた。

「今日もよろしくね、マリク君」

「はい」

マリクと呼ばれた少年は無愛想だが礼儀だけはしめしている。

十六歳ながらも皇女の護衛を任せられくらいの実力を持った少年。

「・・・つて、ちよつと待って。まさかその格好でこれに乗って行くの？」

「？そうですが、何か？」

少年の格好はいつも付けている黒いマントにいつもの軍服姿。

城の中ならまだしも城外では目立つ。

乗り物は馬車。馬車なのだが豪華過ぎる。いかにも皇族が乗っています。す的な外見をしている。

「いや、その。その服装とこの馬車は何？」

「いつも使っているものですが」

「たしかにいつも使っているけど。一応、お忍びで行くみたいな感じだから。服装は私服でいいし馬車もいらさないから」

「そうですね。それなら着替えてきますのでここお待ち頂いてもよろしいでしょうか？」

「オッケー」

マリクは城の方に向き直り歩き出す。

「アリアンティア様。くれぐれもお一人でお出かけにならないようにお願いします」

ドキッ。一本踏み出そうとしたところで凍るアリア。

「ヤッ、ヤダな。そんなことしないよ」

少し棒読みっぽくなってしまっている。

（後ろに目でもあるの！？）

「そうですね。それでは失礼します」

「……………よし！それじゃあ。ん？」

マリクの姿が見えなくなったのを確認し足を動かそうとしたが・  
・動かない。

「えっ！？なんで？なんでわたしの足動かないの！？」

少し混乱しながらも足元を見る。すると、足が凍っている。足と地面が一体化しているように凍っている。凍ってはいるが冷たくはない。

「ウソ！？もうマリク君ったらー！ん~~~~ん！」

アリアの足はマリクの魔法によって凍らせてあった。

アリアが凍り付いた足に苦戦していると

「アリアンティア様。ただいま戻りました」

背後にマリクがいた。

「あっ！マリク君！ひどいじゃない！」

「すみません。しかし、アリアンティア様は絶対にお一人で行かれると思ったので」

「何それ。わたしそんなに信用ないの？」

「はい」

「はいって、少しはわたしを信じてよ」

「すみません。しかし、現にアリアンティア様は動こうとしましたよね？」

ドキッ。また見抜かれてしまった。

「ああ、これは、その」

考える。考えを搾り出す。

「え〜と。……………あっ、そう。準備運動していたの」

「準備運動？」

「そうそうそう！準備運動！ずっと城にいるしこれから歩くんだよ！だから、筋肉を伸ばしてたの！うんうん！準備運動大事だよ！」

必死の言い訳。だれが聞いても言い訳にしか聞こえない。いや、

あの王なら信じるかもしれない。

「そうですか。それならもう行きましょう」

アリアを追い越し先に進むマリク。それを見たアリアは

「ちよつと待ってよ、マリク君。わたし動けないんだけど」

「何言ってるんですか？足元をよく見てください」

「えっ？」

マリクに促され足元を見る。すると、さっきまで氷で地面に張り付かっていたのに氷がなくなっていた。そうマリクが魔法を解除していた。マリクが戻って来てすぐに。アリアは必死言い訳で気が付かなかつたが。

「早く行きましょう。せつかくの時間がなくなりますよ」

そつ言つて歩き出す。

「もう、待ってよ皇女であるわたしを置いて行く気？」

「はい」

一刀両断。

「もう、待ってつて」 そんなことを言いながらピョンピョン跳ねマリクの後を追い掛けて行く。

目差すは城下街にある宿屋さん。

城を中心に周りにはいろんな所がある。

そして、今目指している場所、宿屋さんは町の商店街の方。城の南側に存在する。

アリアは目的地に向ながらもうインドウショッピングを楽しんでいる。「これ可愛くない？」と可愛いものを見つけてはマリクに聞いている。

この国の皇女でもまだ十五歳。年頃の少女なのでオシャレなどに興味があるのは当たり前である。

ちなみに周りの人達はアリアのことを皇女だとは気付いていない。そんなこんなで民衆には気付かれず目的の場所に到着する。

ガジャツ

店の扉が開き反射的に少女は振り返る。

「いらつしやいませ」

元気のいい挨拶。

「こんにちは。エレナちゃん」

エレナと呼ばれた少女はお客の顔を見て固まる。

「えっ？なんているですか？今日でしたっけ！？来るの？」

「ううん。いきなり来ちゃいました」

「そんな。困りますよ、いきなりは。こっちも準備がありますから。もう、お父さん、お母さん。ちょっとこっち来て」

「どうしたエレナ。そんな大きな声出して」

「そうよエレナ。お客様もいるんだから」

エレナの両親が出てきてアリアの顔を見て固まる。「皇女様！すみません！お迎えもしないで」

「あつ、いいんですよ。わたしが急に来ちゃったんで。気を使わないでください。それにあんまり大きい声で言われるとわたしってバれますんで」

「あつ、はい。すみません。それで今日はどういったご用件で？  
なんとかエレナの両親は落ち着きを取り戻し用件を聞く。

「得に用はないけど、何となく来なくなっちゃったの」

笑顔で答えるアリア。

「あつ、それじゃあ、後でお買い物行きませんか？」

エレナがアリアを誘う。「アリアンティア様。用件はあります」

「えっ、そうだっけ？う~~~~ん。・・・あつ、そうだった！おじさん、はい」

アリアは思い出し招待状をロイドに手渡す。

「これは？」

「アリアンティア様の誕生パーティーの招待状です」

ロイドの疑問にマリクが答える。

「えっ？本当ですか？アリア様」

「うん、本当だよ。あと、いつもの呼び方でいいよエレナちゃん」

「うん、わかったよ。お姉ちゃん」

皇女に一般市民がお姉ちゃんと呼ぶのは無礼なことだがこの二人は幼なじみである。別にエレナなの家も王族ではない。

ただ偶然に小さい頃知り合いそれから仲良くなったというわけだ。お姉ちゃんと呼ばれご満悦のアリア。アリアには兄弟がいないため尚更嬉しいのだろう。

「あの〜、皇女様。せつかくお招きされて誠に申し訳ありませんが、私達は遠慮させていただきませす」

申し訳なさそうにロイドが答える。

「本当に申し訳ありません。気持ちとはともうれしいのですが、一市民である私達が皇族の方々と一緒にはいられません」

エレナの母が続ける。

「うん。たしかにいずれいなもしれない。わたしもあんまり得意な人達じゃないし」

「アリアンティア様」

口調が少し強くなるマリク。

「ごめんごめん。それじゃあ、お父様には来られないって言うておきます」

「はい。本当に申し訳ありません。あと、アリアンティア様、この度は十六歳誕生日おめでとございます」

ロイドの言葉とともに他の二人もお辞儀をする。

「はい。ありがとうございます。その言葉だけで十分嬉しいです。それを満面の笑みで返すアリア。

「それじゃあ、お姉ちゃんちょっと待ってて。出掛ける準備するから」

エレナが自分の部屋に行ったのでイスに座って待つたせてもらうことにした。出された紅茶を飲みながら。

町に着たはいいが目的地は決まっていな。ただ、いきあたりばったりで店を見て回る。他愛もない会話をしながら。遠くから見れば仲の良い姉妹が友達にしか見えないだろう。

「アハハハツ……。ところでさアイツから何か連絡とかあった？」

笑いの後、少しだけ真剣な顔付きになるアリア。

「……。もしかして、兄さんのこと？」

エレナもアリアつられてか真剣な表情になっていた。

「うん」

「……。特に、ないよ」 歯切れが悪い返事。

「そう。それならいいの……。じゃあ、今度はあそこのお店見してみよ」 アリアはそんな返事を気にした様子はなくすぐに話題を変える。

「う、うん。待つてお姉ちゃん」

アリアを追うエレナ。何かを隠している。

マリクは遠くで二人の見守っている。何が起きても大丈夫なように。

もしなにか起きたとしてもあの方だけは守らなければならない。

この世界の女神である。あの方だけは。

そんなことを考えながらマリクの視線はアリアから離れることはなかった。

パーティー2日前 少年少女の日常 (後書き)

少しごちゃごちゃしてますが、ここまで読んでくれてありがとうございます。  
うざいます。

次も頑張って書いていきますのでよかったら読んでください。

## パーティー前日1 不穏な動き

アリアはいつも通りの朝を迎えた。今日はいつもと違い慌ただしい一日になりそうだった。

なにせ明日は自分の誕生パーティー。自分が主役である。なのでアリアの挨拶、アリアの衣装を決めなければいけない。

「あゝ、今日は疲れそう」

朝が弱気なアリア。朝が弱いからでもある。

ところで今はというとドレスの試着中である。なので着替えさせてくれるメイドがいつもの倍以上いる。衣装も数えきれない。

メイド達はアリアにドレスを着せては脱がしの作業を繰り返し行っている。

気が付けば後ろにはドレスを持ったメイドの行列があつた。アリアはその行列を見て俄然やる気が下がった。

メイド達はそんなアリア気にせず「こっちの方がアリアンティア様に似合ってます」。「こちらの方が大人っぽく見えますよ」。「やっぱりアリアンティア様にはピンクが似合いますね」などなどもはや着せ替え人形のようになっていた。

そんなアリアはされるがままの無抵抗。

(うとうとう~~~~)

心の中で呻く。

一着を決めれば言い訳ではない。最低四着。

午前中に町を回るために着るもの。昼食の食事会。最後に夜パーティー用。後はもしもの時の予備。

(・・・はっ、はやく、終わって・・・)

アリアの悲鳴はだれにも届かずドレス決めは昼食を挟んだ後も続けられた。

残りの午後の時間は何を話すか考え、練習をした。すべてが終わった時には日もとっくに暮れていた。

アリアは夕食とお風呂が終わったあと自分の部屋に戻りベットに倒れ込んだ。

「もうダメ〜！疲れた〜！」

精魂尽きた感じになっていた。

「明日はちゃんとしないと」

その言葉を最後に眠りについてしまった。

午後の時間。マリクは訓練場にいた。

毎日の日課となっている訓練をしている。しかし、マリクもこの国の騎士、任務がない時以外はほぼ毎日行っている。

対人戦もするがマリクはだいたいシュミレーションで訓練する。

シュミレーション戦なので対戦相手もホログラム。しかし、相手の強さ、数、対戦時間など設定できる。

今のフィールドは荒野。無限に広がる荒野。

辺りには何一つない。あるのは地面の土、枯れた木が数えられるくらい。

そこにマリクがいる。

マリクは荒野に立ち武器を展開している。両端から刃があり、中央部には柄がある。二本の剣を柄どうしで取り付けた感じだ。

刃は透明で水色の光を放っている。マリクが魔力で形成された刃。その戦闘態勢のマリクを五人が取り囲んでいる。

『プログラム設定。エネミーレベル、MAX。人数99人。時間無制限。・・・いつも通りの設定完了。準備はいい？マリク』

スピーカーから聞こえてくる女性の声。

「ああ、いつでもどうぞ」

冷静に答える。

『それではシュミレーション訓練を開始します』

その言葉とともに相手が一斉に動き出す。腕を刃物変化させて。エネミー達は囲んでいる状態のまま中心にいるマリクに切り掛かる。

マリクは当たるギリギリのところまで屈みツインブレードを頭上に掲げて受け止める。数センチ上では刃どろしだがガチガチと力比べをしている。一歩間違えは死が待っている。

それでもマリクには恐怖を与えるには足りなかった。

「雑魚が束になって」  
ただ切り捨てる。

マリクは屈んだままツインブレードに回転を加えながら五本の刃を跳ね返す。エネミー達は後方に吹き飛ばされる。反撃されないためにすぐに動くマリク。狙いは正面の敵。凄まじいスピードで敵に追い付き刃を振り下ろす。

エネミーは飛ばされた状態だかマリクのツインブレードを受け止め、弾く。しかし、マリクはそれを予想していたとばかりに弾かれたと同時に相手の後ろに回り込み切る。1体撃破。それでもマリクの勢いは止まらない。

残りの4体も苦戦せずツインブレードで切り裂く。『やっぱり強いな。それじゃあ、次』

5体追加。またもマリクを囲んで出現。

マリクの周りに水色のオーラを出現する。

「我を守る盾よ シールド」  
マリクの周りに六角形の板が3つ現れる。

「くらえ！ アイスホーン」  
かざしたマリクの手から鋭く尖った大きな氷柱が出現し放たれる。相手は体を貫かれ倒れる。

残りも シールド で相手の攻撃をガードしつつ下級魔法で撃破する。

『マリク、ウォーミングアップはこれくらいでいい？』

「ああ。後は雑魚、全部出せ」

『了解』

承諾もらいエネミーを出す。そう今度は全員。フィールドを次々に埋めていくエネミー。

荒野には88体のエネミーにマリク1人。

こんなこと自殺行為にしか思われないがマリクは攻める。四方八方からの攻撃に シールド で防ぎ斬撃と下級魔法で対抗する。

全体魔法も使えるが敢えて使わない。

敵の数はみるみるうちに減っていった。そして残り20体をきつた頃。

「そろそろ終わらせるぞ」

マリクの周囲の空気が変わった。さらに凍てつくように。

エネミー達は残る全勢力でマリクに挑む。眼前に迫る敵に対してもマリクは目を閉じる。

集中する。

「氷の粒手よ。我が敵を撃ち抜け。ダイヤモンドダスト」

先頭に来ていた敵が刃を振り下ろす。しかし、目の前で刃が止まる。

マリクの魔法が発動。氷の粒が無数に出現。

敵目掛けて一斉にガトリングガンのように撃ち出される。次々向かってくる敵を返り討ちにしていく。

細氷ほこりが止んだ時には敵の姿はなく荒野にはマリク1人だけ残された。

『さつすが、マリクだね〜』

感心した声が聞こえる。

『じゃあ、最後の1体行くよ』

「さつさと来い！」

スピーカー越しの女性ではなく戦う相手にだ。

最後1体は特別でボスの存在だ。

『今日の相手はコイツだー！』

敵が現れる。2メートルを超える長身。体は筋肉の鎧で覆われて



「どうしたの!？」

スピーカー越しで聞いた声の持ち主。

「分からない!しかし、何者かがシステムに侵入したと思われる」  
男性の焦った声。周りの人達も慌ただしく動き回っている。

「なんでこんな時に!いいわ、まずは訓練を中止しマリクを呼び出して!」

しかし、マリクをモニタリングしていたモニターが、すべて真っ暗になる。

「レイヴィ!駄目だ!システムが全停止した」

レイヴィと呼ばれた少女。19歳でシステム管理室のオペレーターをしている。

マリクとはマリクが入団した時に知り合いそれからの付き合いだ。  
「どうしよう」

戸惑うレイヴィに対し状況は悪くなる一方。

## フィールド・荒野

異変はすぐに訪れた。

マリクは背後から爆発するかのよう膨れ上がる魔力を感じた。  
背後を振り返る。

そこには倒れる寸前だったリザードマンが背後に・・・もう手の届く距離にいた。リザードマンは腕を振り上げていた。

「くそがつ! シールド」

回避が間に合わず仕方なく シールド を無数召喚し壁を作る。  
向きを変え腕をクロスさせガードの態勢をとる。

リザードマンの爪が シールド を突き破りマリクに直撃する。  
「くっ!」

マリクは抗うことなく後方に飛ばされ丘になっている壁に激突する。

丘は激しく崩れ辺りは砂煙で見えないくらいだ。

砂煙が晴れマリクが顔を出す。すると、リザードマンの様子がおかしい。

筋肉で覆われた体がさらに膨張し太く力強いものとなり体格も大きくなる。爪も牙も鋭さが増す。

変化が終わった時には4メートルに近い身長になっていた。

「くそがつ！・・・何なんだ、アイツは！」

たしかに倒したはずだ。手応えもあった。なら何故ヤツは消えない。どうして変化する。今までこんなことはなかった。ならシステム管理室で何かあったか。

「おい、レイヴィ！あのリザードマンどうなってるんだ！」

一人で考えてもしかたない為システム管理室に声をかける。

『・・・・・・・・・・』

しかし、なんの応答もない。

（やはり、あつちでも何かあったか。となると、考えられる原因は1つしかないか）

リザードマンを見る。どちらにしろヤツを倒さなければどうにもならない。

「訓練の追加だと思えば余裕だろう」

これからの方針が決まり起き上がる。

強化型リザードマンは狂いそうなほどの咆哮を挙げている。

そんなリザードマンを見据えツインブレードを握り直す。再度、戦闘モードに入る。

先に動いたのは意外にもリザードマンだった。

「何！？」

凄まじいスピードに思わず声が出てしまった。さっきの比ではない。倍、それ以上に。マリクとほぼ同じくらいだろう。

「くっ」

シールド が間に合わず爪撃をツインブレードで受ける。

「雑魚のくせに！」



だがそれで終わりではなかった。マリクは氷像に追撃を加える。氷がツインブレード全体を覆われていく。

「クラストター・エッジ」 氷の刃を振り抜く。

声を挙げることもできず切り付けた部分から砕け散る。あとに残されたのはリザードマンだった氷の残骸だけ。

「ふん」

一度、剣を振る。

「いつまでそこに隠れてる」

「ふふっ。やはり、バレましたか。さすがですね」

さつきマリクが激突した丘の瓦礫から姿を表す。黒いフードを被っている怪しいヤツ。

「お前がやったのか？」 「まあね」

聞いているとやる気がなりそうな間の抜けた声。幼いような感じもする。

「お前の目的はなんだ？内容によつては・・・殺す！」  
そんな黒フードに怯まず話を進める。

「ちよっ、ちよっと待つてよ！そんな怒らないでよ。僕はただ君を見に来ただけだから」

「何の為に？」

「だから、ただ見に来ただけだつて」

「・・・。ふざけるな！」

黒フードに切り掛かる。が、手応えは全くなかった。

マリクは黒フードを見失う。

「お~~~~い！こつちだよ〜！」

マリクは声の聞こえる方に振り向く。

黒フードは違う丘の上に移動していた。

「危ないじゃないか」

（余裕だつたくせに！）

心の中で舌打ちする。

「僕は本当に見に来ただけなんだよ。これ以上ここにいると本

当に殺されそうだから僕帰るね。・・・あと、これ返すね」

と、黒フードは何かをマリクに投げってくる。マリクは反射的に受け取る。

「な!？」

それはアクセサリー。いつも剣帯に吊り下げていた物。レイヴィに無理矢理持たされたお守り。

マリクは慌てて剣帯に目を向ける。やはりない。

「ニヒヒヒツ。それじゃあ、バイニヤ」

視線を戻した時にはもう誰もいなかった。

『マリク、大丈夫?』

通信が回復したのかレイヴィの声が聞こえてくる。 「・・・」

『マリク?』

返答がないため聞き直す。

「ああ、何でもない」

とにかく異常がなくなったのだと確認し氷の刃を解く。柄だけになったツインブレードをマントを翻して腰に戻す。

レイヴィのお守りを剣帯に戻す。

「レイヴィ。どうなっているんだ?」

『それが分からないの。いきなり、システムが誰かに乗っ取られてシステム全停止。モニターも切れちゃったからそっちの状況も分からないの。マリクの方はどうなったの?』

「そうか。俺の方は・・・」

マリクはさっきの出来事、倒したはずのリザードマンが蘇って襲ってきたこと黒フードのヤツがいたことを報告した。

『そっか。それじゃあ、その黒フードのヤツがマリクの実力を見たかったってこと?』

「そうかもしれないし他にも何か目的があったのかもしれない。それに・・・嫌な予感がする」

マリクは険しい顔付きになる。

何故この時に?何故アリアンティア様の誕生パーティー前日に?

何か嫌な予感がしてならなかった。

マリクは訓練場を後にした。

王に報告するために自室に向かったマリク。

報告後、王は悩んだが誕生パーティーを中止にはしなかった。

他の国の王などもこちらに向かつて来ている。パーティー前日にキヤンセルなど失礼過ぎる。事情を話せば分かってくれる人もいればそうでない人もいる。

城の守りを増やす考えで話は進められた。

パーティー前日1 不穏な動き (後書き)

今回はマリクの魔法バトルを中心に書きました。どうぞでしょう。  
また、読んでください。

## パーティー前日2 悪い予感

今日は昨日のお礼ということで村長の家に向かった。

ローザは庭で洗濯物を干しているところだった。

「クレイアちゃん、本当にごめんなさいね」

ローザが洗濯物を干している。長女のエリは母の手伝いをしている。

「いえいえ、俺の方がいつもお世話になってるんでこれくらいどうってことないです」

「ありがとう。ちよつと、あんたたちもつとあつちで遊んでなさい！洗濯物に埃が付くでしょう！・・・はあ、本当にクレイアちゃんをちよつとは見習ってほしいわよ」

洗濯物の近くで走り回る双子の兄弟。すごく楽しそうだ。

「元気があつていいじゃないですか。それにあの年だとあれが普通ですよ」

そういうクレイアはというと一番下の女の子 イリムとままごとをして遊んであげていた。

「ねえ、お兄ちゃん。今日は晩御飯までいるの？」

「いや、晩御飯前には帰るよ。毎日悪いし」

エリの問いにクレイアは遠慮して答える。

「えー！晩御飯食べていけばいいのに！」

残念そうな声で言うのでクレイアも苦笑いになっていた。

「そうよ。遠慮しないで食べていきなさい」

ローザもすすめてくる。「えっ、でも・・・」

「もういいから食べていきなさい！」

「・・・分かりました。それじゃあ、今日もお世話になります」

「よしよし」

ローザに強い口調で言われ根負けしたクレイア。ローザは結構、頑固なところがあるので結局食べていくことになる。

別にクレイアにとってローザ達と食事することは苦ではない。正直、いつも1人で食事をしているので逆に有り難い。

「なあなあ、兄ちゃん」 庭先から名前を呼ばれ振り向く。

「今度は俺達と遊ぼうよ」

双子の兄 アルが家の中に顔を出して言ってくる。

「もうちょっと待ってるよ。さっきジャンケンで負けただろ。イリムが先って決まっただろ。イリムが満足するまでな」

「もうちょっと待とうよアル」

双子の弟 ロンが静止させる。ロンはアルに比べ少し物静かである。

ちなみに見分け方は右目にホクロがあるのがアルで左目がロンである。

「ええ〜！つまんねーよ！」

「もう、クレイアお兄ちゃんはわたしとあそんでるんだからアル兄はあっち行ってよ！」

痺れをきらしたのかイリムが怒り声で言うてくる。

「なんだとー！」

ケンカになりそうな雰囲気。

「アル！あんたうるさい！」

エリが怒鳴る。

「はあ！？お前に関係ないだろう！」

火に油状態で2人は睨み合ってバチバチ火花を散らしている。

「ちつよと、2人ともケンカはやめろよ。アルも午後には遊んでやるからそれまでロンと遊んでろよ、な」

ケンカになりそうなところをクレイアは止めようとする。

「マジで！？ヤッター！ロンあっちで鬼ごっこしようぜ！」  
「すごく単純なアル。」

「また〜？待ってようアル」

ロンも渋々ながらアルに付いて行きまた走り回っている。

「本当にごめんなさいね、クレイアちゃん」

今のやり取りを聞いていたローザから謝罪の言葉が届く。

「大丈夫ですよ」

いつもの優しい笑顔で返す。

「お兄ちゃん！」

イリムが頬を膨らませて怒っている。とてもかわいらしい顔で。

「ごめんごめん。続きをやるっか」

「うん」

(そういえばアイツも怒った時はあんな顔で怒っていたなあ)

心の中で思い出す1人の少女。大分、逢っていないあの少女の顔を懐かしく思い出すクレイアだった。

昼食の後、約束していたアルとロンと遊んであげることにした。

「なあ、兄ちゃん！秘密基地に行こうぜ！」

瞳を輝かせて言うてくるアル。

「うんうん！行こうよ！」

ロンも誘ってくる。

「秘密基地か。そうだな、久しぶりけに行くか。」

「「ヤッター！」」

二人の喜びの声が重なる。双子独特の重なり声。

こうしてクレイア達3人は秘密基地に行くこととした。

秘密基地は裏山にある。山といっても獣道を行くというわけでもなく普通の山道を登って行く。

この山には鹿や兎などが住み着いている。川には魚もいるのでこの村の食料元になっていてこの村にとってなくてはならない場所だ。凶暴な魔物などは何十年も確認されておらず安心できる所でもあって子供達も遊びの場ともなっている。

しかし、一部の猪は暴れん坊ではあるがこちらから何もしなければ襲ってはこない。襲って来たとしても倒せない相手ではない。

そんな山を3人は登って行く。

アルは小枝を片手に探検隊の隊長気取りで先頭を進む。大きな声で歌を歌いながら。

ロンはアルの後に続き、アルに合わせるように大きな声で歌っている。

クレイアは一番後ろから「ホント元気だなあ」と思いながら2人を見守っている。風で赤いマフラーが靡なびいている。クレイアの腰には愛用の剣がある。安心できる山だと言っても何が起きるか分からない為、念のために持ってきている。

「お前らあんまりはしゃぐなよ！」

2人には逆効果でさらに大きな声で歌っている。

そんなこんなで山の中腹くらいの所にその秘密基地がある。

3人の秘密基地は木の上であり木をかき集めて作ってある。壁はないが雨を凌ぐ屋根と床に一応、落ちないように策がある。

「到着だー！」

アルが吠える。

「疲れたー」

ロンが弱音を吐く。

「よし！今日はだな〜・・・」

「待つてよ！ちよつと休ませてよ」

「何言つてんだよ！兄ちゃんが遊んでくれてんだろ！時間がもつたいないじゃないか！」

「やつとクレイアが遊んでくれたことに疲れよりも喜びの方が勝っていた。」

「アルも俺も疲れたからさ、休も」

「疲れたようには見えないがロンに気を使ったのは明白だった。」

「えっ！・・・うん。まあ、兄ちゃん言うならしかたないか」  
しかし、アルは気付かなかった。

「悪いなアル」

「いいよ。それよりあとでしっかり遊ぼうな？」

「オツケー！」

親指を立てて笑顔で答える。

納得したアルが先に歩き出した。

「クレイア兄ちゃん、ありがとう」

ロンが申し訳なさに言ってくる。

「うん？気にすんなよ、ロン！それより、ちゃんと体力戻しとけよ！これから目一杯遊びんだから！」

先程と変わらない笑みで言うクレイア。

「うん！」

そう言っただけでアルを追いかけけるロン。結構元気そうに走っていった。

10分、15分程休んだあと。

「よっしゃあ！今日はモンスター狩りだ！」

アルやる気に満ちていた。

「モンスター狩りって言ってもいつもの猪狩りでしょ？」

「猪狩りじゃない！だれがそんな名前と呼ぶかー！」

「でも・・・」

「でも、じゃない！それに猪だけじゃない！一番デカイのを持って来たヤツが勝ちなんだからモンスターでもいいだろ？」

「分かった！名前はモンスター狩りな。ロンもそれでいいよな？」

「う、うん」

いまいち納得してなさそうなロンであるが話が進まないため無理矢理納得させる。

「それで他はいつもと同じか？」

「そう。いつも通り一番デカイのを持ってきたヤツが勝ち。時間は夕暮れ前まで」

「オツケー、分かった。」

本当は子供にそんなことさせてはいけながこの2人は魔法が使える。そこら辺にいる普通の子供よりは断然強い。この山にいる獣程度なら負ける訳がない。

「その前に俺から、な」と、クレイアが付け加える。



「つたく！それよりなんでアルここにいる？」

その質問を待ってたしたとばかりに悪い笑顔になる。

「今日は協力しようぜ！」

「協力？」

なんだか悪い予感がしてきたロン。しかし、決め付けるのはまだ早い。一応、聞いてみることにした。

「そう。兄ちゃんをギャフンって言わせるために大物を見つける。そのためにはロン。お前が必要だ」

嫌な予感が当たりだしてきた。

「イヤだ！」

きっぱり断る。

「つて！なんでだよ」

「危ないだろ？」

「冒険に危険は付き物だ！」

胸を張って言い切るアル。清々しいまでに。

「だけど・・・」

「だけど、じゃない！お前は兄ちゃんをビックリさせたくないのか？」

「それは・・・させたい」

「なら、大物を捕まえるために俺についてこい！」 少しの間悩む。クレイアを驚かせたいのは事実。しかし、危険もついてくる。

その二択で揺れ動くロン。

そして答えを出す。

「もう！わかったよ！アルについてくよ！」

クレイアを驚かせる方の気持ちが勝ってしまった。もうヤケクソ状態のロン。アルの方はうまくロンを誘導ししたり顔。

「それで？宛てはある？」

「もちろん！俺達はこれから頂上に向かう。」

「大丈夫？」

「大丈夫に決まってるだろ！俺達のコンビに勝てるヤツがこの山

にいるかよ！それに兄ちゃんに勝つには上に行かないとダメだ！」

「・・・分かった。じゃあ、行こう」

澁々ながら頷くロン。

こうして2人は打倒クレイアを掲げ大物を求めて山頂へと向かった。

高い木々の葉からギラギラと赤く輝く2つのものに気付かずまま。

しばらくした後

「今日もそこら辺にいる猪でもいつか。晩御飯のおかずにもなるし」

クレイアは秘密基地の近くにいた。別にやる気がない訳でもないが勝ちを譲っている。大きすぎず小さすぎないものを捕まえてくる。しばらく散策していると程よい大きさの猪を見つける。

「アイツでいいか」

そう呟くとハントを開始する。

クレイアは猪に向かって行く。剣を鞘に入れたままめった打ちにして速攻で仕留める。

「フウ、おかずゲットつと」

クレイアにとっては晩御飯のおかずを取りに行った程度でしかなかった。

クレイアはそのおかずを担いで秘密基地に戻る。

2人の姿はなかった。

日没まではまだ時間があつたで獲物を追っているのだろう。2人が戻ってくるまでクレイアは剣の素振りをすることにした。

剣を抜き構える。目を閉じ肺に空気を入れ吐き出す。呼吸を数回行い集中する。

目を開くとともに動き出す。切り下ろす、薙ぎ払う、切り上げる、突く。流れるような動き何一つ無駄のない動き。まさに川の流れそのものように。

そこでクレイアの動きが止まる。

川の流れを止めたのは音だった。上空で何かの爆発音が響く。クレイアは空を見るが何も異常は見受けられない。空に目を向けているとまたしてもドンつと聞こえてくる。

まだ音の残響が残るなかクレイアは走り出していた。クレイアは一瞬のうちに理解する。

あれはアル達の緊急コール。空で見えた光景は巨大な岩が地上から上空に打ち出され火の玉が破壊するというものだった。

魔法でやっているのは明らかだ。アルの得意魔法は火。ロンは地。それを知っていればすぐに分かる。

だからクレイアは走っている。木々の間をすり抜け、草花を飛び越える。

「アル！ロン！何処だ！」

呼ぶか返事はない。あの2人が助けを呼ぶ相手。胸騒ぎする。

先を進みながら時たま上がる目印に向かう。

そして、木々がなくなり開けた場所に出た所でまた、目印が上がる。目印はほぼ真上辺りで確認することができる。

「アルー！ローン！」

「兄ちゃん！」

「クレイア兄ちゃん！」

声が返ってくる。

「アル！ロン！こっちに来ーい！」

2人を自分の方に誘導する。2人もクレイアがいる木々を抜けて開けた場所に出てくる。クレイアの所に向かってくる。

そして、アル達を狙っていたヤツが姿を表す。

「っ！？」

クレイア絶句する。予想を遙かに越えるもの。予想にも出てこないものが出てくる。

赤い双眸。緑の鱗で覆われた身体。背中には翼。手足は細いよう  
でいて筋肉が浮き出ているくらいに発達している。身体と同じくら

いに長い尻尾。頭から尻尾までに刺のようなものが並ぶ。牙と爪は鋭く刃そのものだ。

「なつ、何でこんな所にドラゴンが!？」

ドラゴンは四足歩行でアルとロンに迫っている。クレイアからは到底間に合わない。

アルとロンはドラゴンに届くか届かないかのギリギリ位置にいる。

「うわっ!」

そこでロンが派手に転ぶ。

「ロン!」

クレイアは叫ぶ。この距離からではこれしかできない。

「ロン!くそっ!これでもくらえ! ファイヤボール」

アルの手から火球が出てくる。火球はドラゴンの顔目掛けて飛んで行き、直撃する。

ドラゴンには傷一つ付いていない。ドラゴンの牙がロンに迫る。

「うわー!助けてー!クレイア兄ちゃん!」

ロンの悲痛な叫びがクレイアの耳に痛く響く。

「くっ!」

(なんでこんな誰もいない時に!もし魔法を使って・・・)

アルはロンを庇うように身体を近づける。2人に死が近づく。受け入れたくない死に対して目を背ける。

「それでも!」

クレイアの足に力が入る。跳ぶ。普通なら届くはずもない距離を跳ぶ。魔力変換で筋力アップの結果である。

「見殺しにするよりマシだ!」

クレイアは2人とドラゴンの間に入り剣を抜き牙を弾く。その隙に2人を両脇抱えドラゴンとの距離をとる。

「2人は離れてろ」

そう言って2人を逃がす。

「もしそっちに行ったら、ロン!お前の魔法でアルを守るんだ!」

ロンは防御系の魔法が得意である。

「うん！」

力強い返事が返ってきた後、2人はここから離れる。

クレイアは2人が離れたのを確認にし顔が綻ぶ。ドラゴンに向き直り剣を構る。

剣の切っ先が敵を狙う。

ドラゴンの双眸がクレイア捕らえ雄叫びを挙げ突進してくる。クレイアもドラゴンに突っ込む。

交錯する。クレイアの斬撃は鋼の鱗に弾かれる。

ドラゴンの爪はクレイアを確実に捕らえることは出来ず左肩の衣服を切り裂くだけだった。

ドラゴンは続けざまに突進してくる。

クレイアは剣で爪撃の軌道を変えただけで終わる。クレイアが通り過ぎたと思つた瞬間に右側から動く気配を感じる。気付いた時には目の前にそれはあつた。それは尻尾だった。

「くっ！」

回避が間に合わず剣でガードする。

クレイアは数回弾んだあと地面を転がる。が、すぐに立ち上がり迎え撃つ。

再度、交わる。

2人の距離は離れる。

ドラゴンは勢いを抑えることが出来ずに足が空回りしながら方向変換する。今一度クレイアを切り裂く為に。

クレイアは地面を滑りながら勢いを殺す。クレイアはドラゴンを見るが構えはしない。剣を鞘に納め目を閉じ集中する。

ドラゴンが迫るなか集中を高めていく。

そして、目を開く。

振り下ろされる三爪。かわしすれ違いざまに剣を抜き放つ。居合切り。

鱗を切り裂き、肉を切り裂く。血飛沫がほとばしる。

「ギャオオオオオ！」

ドラゴンの悲鳴が拳がる。

そんなドラゴンにお構い無しに切り刻んでいく。距離を離し再度突撃するもクレイアはかわし、かわりに斬撃を浴びせる。

見る見る内にドラゴンは傷だらけになる。

もう何度目になるだろうか。間合いを空ける。

(これで決める！)

意を決し最後の一撃を加えるべく走る。疾風の如く。

しかし、ドラゴンもそれを察知したのか翼を広げだした。

突風が起こり土埃と草花が舞い上がる。

「飛ぶきか!？」

さらに翼に力が入る。ドラゴンの手足がゆっくりと地面から離れる。

クレイアは遠距離の魔法が出せないため次の一撃でキメることも当てることも出来なくなる。

「くっ!」

遠くで戦闘を見るアルとロン。

「やつぱり兄ちゃんスゲー」

「うん。それに動きが違う」

いつも優しいクレイアを見ていた2人。今の本気の戦闘を目の当たりにし恐怖すら感じてしまっている。

それにいつも特訓に付き合ってくれた時とは全然違う。別人とも思える動き。その動きを見て自分達とは実力が違うのだと改めて実感させられてしまう。

戦闘はクレイアの優勢で終わりを迎えようとしたところドラゴンが動きが変わる。

「なあ、ロン。ドラゴンのヤツ飛ばうとしてないか？」

「うん。もしかしてクレイア兄ちゃんヤバイかも」

「なんで？あんなに強いのに」

「アルはクレイア兄ちゃんが魔法使つてるとこ見たことある？」

「ないけど。今、魔力変換してるじゃん」

「そうだけど、でもそれだけだよ。普通の魔法を使つてない腕組みをを考えるポーズをする。」

「そういえば・・・そうだな」

「でしょ」

納得するアル。魔力変換で身体強化は少ない魔力量で部分的に魔力を集めればいいが、撃ち出す魔法は多くの魔力と技術、才能が必要だ。

多分、クレイアは使えないのだろう。魔力を溜めようとはしていない。

ドラゴンは5、6メートルくらいの高さまで上昇している。いくらクレイアでも届くか届かないかの距離。

ドラゴンその高度を維持し口を開き炎を溜める。

「うわっ！あれマジヤバイよ！」

ファイアブレス。どのドラゴンも使える技。威力は個体差があるが強力な技。

「クレイア兄ちゃんが危ない！」

「・・・ロン！俺達で助けよう！」

「えっ！？無理だよ、俺達は何やったところで邪魔になるだけだよ！」

ロンが悲鳴混じりに叫ぶ。

「そうかもな。でも、あれなら何とかできると思う」

「あれって・・・たしかに何とかなるかもしれないけど、1回も成功したことないんだよ」

「でも、やるしかないだろ！兄ちゃんを助けられるのは俺達だけだろ！」

そう、今ここにはアルとロンしかいない。アルの目には強い決意があった。

「・・・分かったよ、アル。やろう！」  
ロンも覚悟を決める。

2人は目を閉じ集中する。2人の周囲にはそれぞれ違うオーラを纏っている。

アルは炎の赤いオーラを。ロンは地の茶色のオーラを。互いが互いの魔力の波長を探る。

そして、重なる。

「燃え盛る炎よ・・・」

「強固なる岩よ・・・」

声も魔力も重なる。

「くらえー！ メテオストライク」

合体魔法。

隕石には程遠い大きさではあるが大人を覆い隠すくらいはある。

まだ、未熟ということもありこの大きさが2人の限界である。だが、この2人の最強魔法だ。

燃え盛る巨岩はドラゴンに一直線に飛んでいき顔面に直撃する。

ぶつかった衝撃で火炎弾の照準がズレ大地をえぐる。ドラゴンは地上へと墜落する。

(アルとロンか。無茶して。でも、ナイスだ)

クレイアはそのまま走っていた。笑みを浮かべながら。

ドラゴンは派手に地面に叩きつけられる。その後ふらつきながらも身体を起こす。クレイアを睨み火炎弾を連続で吐き出す。

しかし、それでもクレイアは止まらない。次々と向かってくる火炎弾をかわし直進する。ただただ、地面に着弾するだけ。

そして、ドラゴンの眼前に迫る。

「無影剣」

クレイアの声だけを残して消える。身体も斬撃も影すらも。

気付いた時にはドラゴンの背後に剣を振り切った状態で立っ

た。何事もなかったように一度、剣を払ったあと鞘に納める。カキンツと音がした後、ドラゴンの肩口から横つ腹までに一筋の線が入り鮮血がほとばしる。身体が崩れるように倒れていく。

「ギヤオオー……」

その咆哮を最後にドラゴンは動かなくなった。

「ふう」

安堵の息が出てくる。

「兄ちゃん！」

「クレイア兄ちゃん！」

アルとロンが手を振りながらこっちに近づいてくる。2人の無事な姿を確認しなおのこと安心する。

「兄ちゃん大丈夫？」

「ああ、何ともない」

いつもの優しい笑顔で答える。2人もその笑顔を見て笑顔になる。

「あつ！でも、クレイア兄ちゃん肩が……」

そういえば左肩を切ったことを思い出す。

「大丈夫だつて！服を切っただけだから何の問題もないよ」

腕を組み少し声に力が入る。

「それより2人もあんな無茶してダメだろ！もしかしたらそっち行っていたかもしれないだろ！」

今回はたまたま運が良かっただけだ。

「もうあんな無茶するなよ」

「ごめんなさい」

2人は下を見て反省している。そんな2人の反省する姿を上から見下ろす。

そして、2人の頭に手を置き

「でも助かった。ありがとうな」

そう言っ髪がグシャグシャになるくらい力強く頭を撫でた。

2人に笑顔が戻る。

「よし、一回村に戻るか。ルドルフさんにも報告しないと」

クレイアが切り出す。

「うん！わかった」

2人の承諾得、村に戻ろうとアルとロンは歩き出した。

クレイアは少し考え事をしていた。今のドラゴンについて。

たしかにドラゴンの住む山は一つ先の山にある。でもドラゴンはその縄張りからは出ないはず。考えられることは食料が尽きたか。もしくは何物かに追い出されたか。

推測はできるが、答えは出ることはない。

(明日、行ってみるか?)

そんなことを考えていると小さいながらも地震が起きる。

「またか、最近多いな」

この一週間で何回も起きている。最近は揺れも小さくなってきたので大丈夫だと思うが・・・

「そういえば明日はアイツの・・・」

これは偶然なのか？それとも・・・。自然と顔が強張る。

クレイアは山の向こうにあるであろう王都を見つめていた。

そこで、ふと思いつく。幼なじみの顔を。いつも輝いていた笑顔。

思い出ただけで表情がいつもの顔に戻ってしまった。

「兄ちゃん！何やってんの？早くいこ！」

「ワリー！今、行くよ！」

アルに促され走り出すクレイア。

辺りはもう暗闇に包まれはじめていた。

パーティー前日2 悪い予感 (後書き)

今度はクレイア側での戦いを書いてみました。

何でもそつですけど出来事などを文章にするのは難しいですね。

自分で思い描いた戦闘シーンを読み手の方々につましく伝わればいいなって思います。

どこかの空間。辺りは真っ暗でよく見えない。唯一ある明かりはロウソクが数本ある程度でそんなに明るくもない。

そこに一人ソファアを占領している者がいる。

仕草からからして退屈そうにしている。しかし、フード付きのコートトのせいで顔も性別も分からない。

「ふああーあーあ」

大きなあくび相当、暇なのだろう。

そこに現れる一つの影。「今、戻った」

女性の声。やはり黒のフードで顔が見えない。言葉には空間を凍らせるような雰囲気がある。しかし、それほど年上ではなく多分、20になるかならないくらいだろう。

「おっそいよ、セル姉」

「お前が早いんだ。それよりシャドウ、ちゃんと調べてきたのか？」

「あつたり前でしょ。僕をなめないでよ」

シャドウと呼ばれた者は幼さが残る声で言う。

「そう。なら、どうだったの？」

セル姉と呼ばれた女性が調べた結果を求めてくる。

「なんかね、ちよつとがっかりかな。もうちよとやれるのかと思っただけど、ぜんぜん」

「なら私達の出番は無しってところかしら」

「あつと！あくまで僕は全然って意味だからアイツらだけじゃちよつとキツイと思うよ」

「そう。たいしたことはないのね。アルバス王国のマリクも。あの人達でキツとなると・・・」

彼女は考える。

「それなら少し手を貸してやろう」

もう一人現れる。力強い青年の声。仕草、雰囲気などからリーダー的存在の人だと思われる。

「ルナ兄！やつと来た」

ルナと呼ばれた青年。

「ルナ、それでは誰か一人が加戦すると言うことですか？」

「いや、丁度いい駒がいる。ソイツを使う」

「ふん。丁度いい駒ね。ソイツ強いの？」

「ああ、名の知れた者だ。お前も見れば分かると思う」

「へえ。それは楽しみ」

「それでは準備に取り掛かれ」

ルナが解散の号令をかける。

「了解」

「りよ〜かい」

シャドウが先に消える。「セルシウスちょっといいか？」

シャドウにはセル姉と呼ばれていた女性はセルシウスという名前のようだ。

セルシウスは違う場所に向かおうと向きを変えたが呼ばれたため振り返る。

「はい。何でしょうか？」

「ヤツはどうだった？」

「力を使わないようにはしてるようです。しかし、魔力変換程度の力は使いこなしているようです。手負いだったドラゴン相手にそれだけで勝てるとはたいした剣術と身体能力です。そこはさすがと言ったところですね」

手負いと言う単語が気になる。

「このことから完全には使いこなしてはいない。それに力を使っていない為、魔力も育っていないと思われます」

セルシウスは調べてことを報告し結論を述べる。

個人の魔力量は最初はもちろん低い。しかし、魔力を使えば使う程、戦えば戦う程大きくなる。個人差で限界はあるが。

「そうか、暴走を恐れているか。なら力を使わせる状況を作ればいい」

不適な笑み。

「分かった。セルシウス、お前も持ち場に戻れ」

「はっ」

頭を下げ、もう一度上げた瞬間にセルシウスは消えた。

「ふん、いつまでも力を使わずにいられると思うなよ。お前が使わないなら無理にでも使わせてやる。あの方の復活のためにはお前の力が必要なのだよ。それまで死ぬことは断てじ許されない。それまでに強くなっているんだな、クレイア」

誰かに言うでもなく話している。何故ここでクレイアの名前は  
まだ謎のままだ。

「お前にも役に立つてもらおうぞ。そのために連れ出したのだからな」

「言われなくてもわかってるよ」

いつの間にか後ろに控えていた大柄な男がルナに近寄ってくる。

大柄な男はフードを付けていないため顔が確認できる。赤い髪の短髪。

何か良くない事が起きようとしている。

明日はリアンティアの誕生パーティー。

謎の集団がひそかに動きはじめていた。

## 集会（後書き）

謎の集団の集会でした

いつもより短かったんですけどどうですか？

## パーティー当日 始まりの行進

揺れる馬車の中にアリアはいた。正面の席には王と女王が座っている。

馬車と言っても普通の馬車に比べれば何倍も大きく馬が引くのではなく像が引つ張っている。

外からは見えないようにカーテンで隠されている。

アリアからは見えないがアリアがいる馬車の周りには歩行する兵士、普通の大きな馬車で囲まれながら進んでいる。

「ふうー」

少なからず緊張しているようだ。というのも今日はアリアの誕生日パーティー当日でこの町の人達にも感謝の気持ちを込めてという感じで馬車で町を回るようになっていた。

今日の日程としては午前中は町を回る。昼食は城でいつもどおり取り、夜はパーティー本番で各国のお偉方などと夕食を食べたりダンスをしたりする予定である。

別に挨拶をする訳ではなくただ馬車の上上がり手を振るだけ。

「はあ、わたしこつというの得意じゃないんだけどな」

ため息とともに愚痴を吐く。別に町の皆が嫌いな訳ではない。逆に大好きだ。この町も。ただ大勢の前に出るのが苦手なだけだ。

すると

「アリアンティア様、そろそろ広場です。テラスへお上がりください」

老執事がアリアに声をかける。

「あつ、はい。分かりました」

（よし！）

心の中で気合いの掛け声。その言葉と同時に立ち上がり、テラスへと進む。アリアを追うようにして王と女王が続く。

広場の中央には噴水があり道の歩道にはこの町の住民すべてがい

るだろうの人ばかり。それに加え隣の町の観光客、旅人なども混じっている。

アリアがテラスから顔を出すと大きな歓声上がる。あちこちから、「あつ、皇女様だ」「皇女様、綺麗」「あのドレスとってもかわいらしい」などの声が聞こえてくる。

今日のアリアのドレスは白とピンクを織り交ぜたフリルの付いたかわいらしいものとなっている。

このドレスも高評価を得ているので昨日遅くまで考えたかいたった。

「ほら、アリア。手を振ってあげなさい。笑顔でね」

「あつ、はい。お母様」

母に促されるままに手を振る。笑顔で。

とても嬉しい。自分の誕生日をこんなに大勢の皆に祝福されて嬉しくない訳ない。

本当にこの国に生まれてきて良かったと心の底から思える。それはこの町の人達がとつてもいい人達だから。この国を背負ってきた先代、父、母を誇りに思う。

そんなことを考えながら町の人達を見ている。馬車は進む。この平和な町を。馬車は何事もなく城へと戻る。

しかし、平和だと感じているのはアリアだけだった。

町は賑わっている。今、マリクは建物の屋上にいた。何をしているのかというところももちろん警護だ。

その証拠にマリクの他にも何人も屋上に点々と待機している。

何も起きなければいいが昨日のこともある。本当は昨日の時点で捕まえられれば良かったのだが相手はマリクよりも上だった。そのため逃げた。

「くそっ！」

その事を考えただけで怒りがこみ上がりつい口から出てきてしま

う。

『マリク、そうイライラしないの。昨日のことはしょうがなかった』

レイヴィの声が聞こえてくる。これはテレパシーである。

人にはそれぞれ魔力の波長がある。その波長を探し声を送る。あまり離れては送れないがレイヴィはテレパシーと魔力感知に秀でている。そのかわり、他の魔法はてんでダメだ。

「うるさい！お前は黙ってる！」  
怒りがさらに上がる。

『はいはい！分かりましたよ！』

レイヴィは簡単に引き下がる。マリクの性格を知ってのことだろう。

何も起きなければいいのだがそうもいかなかった。

アリアが馬車から出た時だった。正しく相手はこの瞬間を待っていた。

一本の矢が放たれた。それは間違いなくアリアを狙ったものだった。

警護の騎士が動くなかマリクは動じずその場に留まっている。それでも矢は進む。

そして、マリクは右手を前に出す。

「シールド」

矢はマリクの召喚した盾に防がれる。

幸いにも矢が放たれた事は群集もアリアさえも気付くことはなかった。もし気付くものがいれば大騒ぎ程度では済まされない。悪ければパーティーは中止だろう。

ちなみに防がれれば矢は地面に落ちる前に違う騎士が回収済みである。

「逃がすか！」

マリクは走っていた。シールドを召喚した瞬間にアリアからは目を外して。マリクのシールドはオートで動くことができる。矢

ぐらいの物なら勝手に防いでくれる。

そしてマリクは向かう。矢の軌道から相手がいるであろう場所へ。人影が見える。相手も家屋の上にいるようでそこから下に飛び降り逃げる。

マリクも後に続く。2人は家と家の間の狭い道を進んで行く。そして、周囲を高い塀に囲まれた場所に差し掛かる。行き止まりだった。

「鬼ごっこは終わりだ」

相手は仕方なくマリクに振り返る。フードのマントを着ている。

相手は逃げ切れないと確信し懐に潜めていたナイフを取り出してマリクに襲い掛かってきた。

何の変哲もない直線的な攻撃。そんな攻撃がマリクにあるはずもなく軽くかわされ腕を身体の後ろに持つていかれナイフが地面に落ちる。

「貴様、何物だ」

マリクの問いには答える気がないようだ。せめて顔でも確認するべくフードを剥がす。

「っ！？女！？」

そう女性だった。年は20代半ばくらいだろう。

しかし、その女性はマリクを睨み無言を通すのみ。

「チツ、ダンマリかよ！おい、こいつを連れていけ！知ってる事を全部吐かせる！」

そう言つて後から来た騎士に彼女を渡す。

「何処に行くんだ、マリク！」

先輩の騎士なのか少しイラついた声でマリクに言う。

「まさかコイツ一人だけだと思ってるのか？あんたは」  
さらにイラついた声で返す。

「なんだとー！お前はいつもいつも・・・」

まだ何か言っている先輩騎士を無視しこの場を後にした。

マリクの睨んだとおりアリアの命を狙った者は何人か発見された

が、だいたいはマリクが捕まえることとなった。

今はお昼を少し過ぎたくらい。マリクは城の廊下を歩いていた。話しは王にいつていると思うが一応、報告のために王の部屋に向かっていた。

その途中でアリアを出くわす。

「あつ、マリク君」

いつもどおり話しかけてくる。多分、アリアは昼食を食べ終わり一度、部屋にで戻るのだろう。

「アリアンティア様。午前中はお疲れ様でした」

アリアを労った言葉。

「うん、ありがとう。午前中だけで疲れちゃった」

「夜までは何ないのでそれまではお休みください」

「そうさせてもらうよ。夜まで体力がもたないかも」

「はい、それでは私はこれで」

「うん、マリクもあんまり無理しないでね」

マリクはアリアに一礼し王の待つ部屋に足を進める。アリアは何も気付かないままこの場を後にする。

「誰だね」

扉をノックした後、中から声が聞こえてくる。

「アーサー王様。マリクです。少しよろしいでしょうか」

「マリクか。中に入りたまえ」

「失礼します」

礼儀正しく中に入る。

「早速ながらアーサー王様。すでに耳にしているとありますが・

・

「ああ、アリアを狙った者達の事か。聞いている」

アーサー王はマリクが言い終わるよりも先に言い返す。

「そうですか。今日のパーティーは続けるおつもりですか」

「・・・アリアには悪いが続けるしかならう。他国の王もこっちに向かっている。辞められる訳がない。王の中には気分屋の者もある。気分を損ねて同盟を破棄去れたらかなわん。このパーティーはあの子一人の問題ではないのだよ」

難しい顔になってしまふ王。実際のところアリアのお陰で同盟を結んでいるところがほとんどだ。アリアの・・・女神の存在のお陰でこの国も成り立っている部分もある。もちろん、アーサー王の手柄の良さなどもあるが。

「やはりそうですか。なら私達は守るだけです。アリアンティア様を」

「すまない、マリク。騎士達には城門を固めてもらっている。マリクも頼む」

「分かっております」

力強い返答する。すると、慌ただしい足音ともにノックがされる。

「アーサー王様！」

「どうした、入れ」 部屋に入る騎士。余程急いで来たのかすごい息遣いだ。少し呼吸を整えた後

「ハアハア・・・。た、大変です！港町が何物かに襲われている連絡がありました！至急応援をお願いします！」

「何！？」

王の口から驚きの声が出てしまふ。

「アーサー王様」

マリクが王の返答を待つ。

「・・・分かった。少し兵を送らう。それとアラドも向かわせる」  
「騎士団長がですか！それは有り難いです！」

「すぐに出発の準備を進めてくれ」  
「分かりました」

通達役の騎士が急いで出ていく。

「マリク、お前はここに残って引き続き警護にあたってくれ。もしもの時はお前が対処してくれ」

「分かりました」

左胸に拳を当て了解のポーズをとる。

そう言っってマリクも出ていく。

パーティー当日 始まりの行進 (後書き)

とうとうパーティー当日までできました。  
これからいろいろ動きます。

## ゲームスタート！

数十分前

お昼をまわった頃。アルバス王国に一番近い港にヤツはいた。

「ふう、やっと着いた〜。船旅も楽じゃないね」

フードを被った者。シャドウがいた。

シャドウは船から港に下りる。

今日はアリアの誕生祭ということもありいつもより利用客が多い。

「平和だね〜」

賑わっている人達、場所を見て言う。これから何が起こるかも知らずにと思う。

「おい、待て。お前手伝わたらどうだ？」

シャドウの乗っていた船から大柄な男が現れる。

「え〜〜！イヤだよ！僕は肉体派じゃないから」

「お前、それでも協力者か？」

「たしかに協力はするって言っただけどそれは自分達でやってよ」

親子には見えない2人の会話。

「チツ！ふざけやがって！おい、お前ら積み荷を下ろせ」

「あい、親分」

どうやら大柄な男はこの集団の親分だったらしい。その親分は舌打ちをし子分に命令を下す。

何人もの子分が船から下りてくる。子分は命令されたとおり積み荷を港にどんどん下ろしていく。木材を何枚も張り合わせた四角形の箱。

その箱の中身が重いのか2人3人で運んでいる。

「今日はいい天気ですね〜」

「……………」

緊張感のないシャドウの会話にシカトをキメる。

「・・・そんなに怖い顔して少しはリラックスしたらどうですか？」

「・・・」

チラッと親分を見る。それでも無視。

「ハア〜。・・・あつちの人達はちゃんとやってるんですかね〜」

「お前はさつきから何なんだ！それに俺の仲間を信じられないのか！？」

「そんなことないよ〜。信じてますよ〜。でもこの作戦の成功率を上げる為に僕がここにいるんじゃないんですか」

「そうかよ」

胡散臭そうにシャドウを睨む。そんなことを話している間にも荷物を半分ほど運び終わったところだった。そこで派手な破壊音が響く。

港に來ている大勢の客が一点の方向に注目する。

「いつてててて」

何かに躓き倒れたのだろう。

転んだ本人は地面にぶつけた膝をさすっている。

「あんのつ馬鹿！」

親子が声をあげる。

そう転んだのは先程の子分の1人。

周りにいた子分は急いで辺りに散らばったものの回収する。

散らばったものは運んでいた木箱の破片。そして中身の物。

そんなこんなしているうちに港の警護にあっていた騎士2人が様子を見に来る。

騎士は何が起きたのか見て状況を把握した。しかし、見ても分からない物がある。明らかに不自然な物が散らばっている。

中身の物。それは剣や銃、武器が散らばっている。

「お前達それは何だ」

「えつと、これは・・・」

返答に困る子分。

「あゝあ、派手にやっちゃったね。どうするのさ」

「お前が何とかしろよ」

少し離れた所でこの状況を見ている2人。親分は苛立ちを言葉に隠すことができずにいた。

「見つかつちやったら僕にも無理だよ。……ここまで来たら戦うしかないんじゃないんですか」

「クッソ！」

いつまでも考えている時間もない。こうしている間にも子分達に近づいていく騎士。

「……こんな所で、捕まってたまるか！力押しで城まで行くぞ！」

親分が大型の曲剣のシミターを抜き放つ。そのまま騎士へと突撃する。子分達もそれに続く。

「敵だー！船の近くだー！」

残りの警備の騎士を呼び寄せ応戦する。

「フッ、こっちは計画どおりだよ」

不適な笑みとともに言葉を発する。周りは悲鳴や気合いの掛け声で騒々しくなっていて誰も聞いていない。いや、聞こえない。単なる独り言。

「さあ、ゲームスタートだ！」

歓喜の声を発しシャドウも騒動の中へと飛び込んでいった。

ゲームスタート！（後書き）

港での出来事でした。

次回はもう一度アリア側です。

クレイアの活躍はその次くらいで。

## アリアの魔力（前書き）

不快な思いをした方はすぐに読むのを辞めてください。すみません。

## アリアの魔力

お昼が終わり部屋で1人休憩しているアリア。そこで

「アリア、ちょっといいかな」

父の声だ。

「はい、どうぞ」

アリアの返事を聞き中に入る王。

「午前中はご苦労だったな。疲れてないか？」

「うん、ちよつと疲れたけど大丈夫」

「そうか。それならいいんだが」

「うん？」

少し父の様子がおかしい。何かよそよそしいし、あまり視線を合  
わさないようにキョロキョロしている。

「お父様、何か用があつて来たんじゃないの？」

その問いに少しビクツと反応する父。やはり何か怪しい。

「あゝとだな。その……」

父の答えを待つがいつこつに答えが帰ってこない。帰ってくるの  
は「あゝ」とか「うんゝ」とか「そのゝ」だけだった。

「もうー！用があるならばきつり言つてよ！」

じれったくなり声を荒げる。

「はっ、はいー！ー！」

娘の急な怒鳴り声に驚いてしまう。こついつところは妻のエリザ  
ベスに似ていると思つてしまふアーサー王。

「ええゝゝと、……アリア……すまん！」

弁解の言葉と共に両手を突き出す。

「？……これつて……ドラゴン？」

王は両手にドラゴンを持っていた。しかし、そのドラゴンはピク  
リとも動かない。

「……のぬいぐるみ？」

一応、アリアは受け取ってみる。

「その〜、誕生日プレゼント、ドラゴンの赤ちゃん欲しいって言ったから捕まえようと思っただんだが・・・本当にスマン！」

深々と頭を下げる王。人前では見せられない姿。

「・・・うふっ、もういいよ。謝らなくていいから。ただ無茶なお願いしてお父様を困らせたかったただだから」

あまりにも情けない父の姿に思わず笑ってしまった。

「本当か？なら違う物を渡そう。何がほしい？」

「ううん。何もいらない」

「しかしだな〜・・・」

「ホントにいいね。わたしはこの子がいいの」

そう言っさっき貰ったドラゴンのぬいぐるみをギュッと抱きしめる。

何か言いたそうにしていたがそんなかわいらしい娘を見て言葉を飲み込んでしまう。

「そうか。アリアがそういうならそれでいい。アリア」

「なに？」

「誕生日おめでとう」

「うん、ありがとう。お父様」

その言葉言った後、父は部屋を出ていった。

部屋に静寂が戻ってきた。ぬいぐるみを抱きしめたままアリアは少し淋しい顔になっていた。

日は暮れ辺りは闇に包まれ始めた。

城のエントランス赤絨毯を抜けた先にあるホール。ダンスホール。周りはガラス張りになっていて外の風景を眺めることができ町の家に明かりが点りとても綺麗な夜景となっている。

ホールの中にはきらびやかに着飾ったドレス姿の婦人とその娘達。男性はタキシードでピシッと決めている。

ざっと見ても何百人いや、何千人はいる。それほどこのエントラ

ンスは広がった。ダンスもするのでこのくらいが丁度なのかもしれない。

辺りでは久し振りの再会挨拶や御偉い様方に媚び売りなどの雑談をしている。後は主役が登場するのを待つだけとなっていた。すると

「皆さん。今日はお忙しいなか我が娘 アリアンティアの誕生パーティーにお越しくださいます。誠に有り難うございます」

王がホールの出入口から姿を表し挨拶が始まる。隣には女王が付き添う。

扉を隔て上の階にアリアはスタンバイしていた。ダンスホールから父の声が聞こえる。

「うううう、始まつちやった」

アリアはダンスホールの手前の扉にスタンバっている。

「アリアンティア様。緊張なさらずいつもどおりで大丈夫ですよ」  
老執事のセバスチャンの言葉。

「うん。わかってるよ」

分かつてはいるがそれだけで緊張が完全に抜けることはなかった。

そんなアリアを見てセバスチャンは思う。いや、思っていたことが口から出てきてしまう。

「アリアンティア様。本当に大きくなりましたね」

セバスチャンはアリアが生まれた時からお世話をしてきた。毎年の誕生パーティーで思うこと。

「それにとてもお綺麗になられて・・・爺はとでもうれしゅうございます」

と言ってセバスチャンはハンカチで涙を拭う。

「も、泣かないでよ。別に何処かに行く訳じゃないんだから」

「ああ、アリアンティア様に慰めて貰う日が来ようとは。アリアンティア様が生まれた時のことを爺は昨日のことのように思い出すことができます。小さかったアリアンティア様がこんなに・・・ご立派になられて・・・爺は、爺は・・・」

お嫁にいく父親のように泣きじゃくっている。

「も〜誕生パーティーでこんなに泣く人いないでしょ。早く涙を拭いて爺や」

なんとかセバスチャンを宥めるアリア。

「あつ、ありがとございます」

自分の成長を泣くくらい喜んでいるセバスチャンを見てアリアは思う。

(ここに生まれてきてホントに良かった)

アリアは心の底からそう思った。

だから、見てもらおう。自分がどのくらい成長したのかを。皆に見てもらおう。アリアは強く思った。

「それでは私の話はこの辺にして今日の主役を呼びましょう。この世界の女神 アイリスの力を受け継いだ我が娘 アリアンティアです」

拍手と共に照明が徐々に暗くなっていく。

アリアが待機している扉が開かれる。

「アリアンティア様」

セバスチャンからの合図がある。

「うん！・・・よしっ！」

周りに気付かれない程度に元気な声で返事をし気合いの掛け声。

その後アリアは神に祈る様に目を閉じ両手を合わせる。アリアの周りに魔力のオーラが集まる。しかし、そのオーラの色がどの属性のものにも属さない黄金色。

通常、魔法を使えばその属性の魔法光を発する。炎ならば赤。水ならば青。

アリアの得意属性は光ではあるが光の魔法光は白である。

その謎の魔力を溜めていき次第に背中へと集まる。そこでアリアは飛び降りる。来客がいる、父がいる1階へと飛び降りる。

誰もが想像する嫌な予感。

しかし、その予想は見事に外れることとなる。アリアの背中には2枚の黄金の翼が生えている。

翼をためかせゆっくりと降下していく。その光景は女神がこの地に舞い降りたようだ。

「アリアンティア様。お綺麗ですわ」

「女神様」

「女神様の魔力。神々しいですわ」

「さすが女神様」

などの声が聞こえる。

女神の魔力。それはこの世界を創ったされる女神 アイリスの魔力。アイリスの魔力は十年に1人、百年に1人の確率で継承し生まれてくる。ごく稀に一般の家庭の子供に継承されることもあってその国の王が養子にするともあるがアリアは真正銘、アーサー王とエリザベス女王の実の子である。

アイリスの魔力の証明となるのが黄金の魔力。属性に限らず魔法を発動させれば魔法光は黄金に輝く。

アリアが真正銘この時代の継承者である。

アリアは拍手とともに1階の地に足を着ける。

アリアの演出はこの国にはたしかに女神がいるということを見せつけてのことだ。

翼が光りの粒子を残し消え父と母の傍へと駆け寄る。今度のドレスは青を基調とした物になっていて昼間よりも大人っぽくしている。

「え〜っと、今日はわたしの誕生パーティーに来てくださってありがとうございます。まだまだ未熟なわたしで色々わな人達に迷惑をかけてきたと思います。しかし、皆様のお陰で今日まで生きることもできましたし成長してこれたと思っています。これから迷惑はかけると思いますがこれからも暖かい目で見守って頂ければ嬉しく思います。今日は本当にありがとうございます。パーティーは始まったばかりなので楽しんでいってください」

また拍手が起こる。

「アリア、立派になって〜」

「あなた!」

娘の挨拶に思わず涙が滲んでしまう王。

「アリアンティア様〜」

「セバスチャンまで〜!」

上を見ればセバスチャンが号泣している。女王は大きなため息が出る。

そんなこんなでアリアの挨拶が終わりまたホールに賑やかな雰囲気に戻る。

アリアは両親と一緒に個人個人に挨拶をしに回っていく。昔からよくしてくれている人達からは心の籠った言葉が「ありがとう」贈られ話しが弾む。

しかし、中にはアリアの・・・女神の存在が目的でアリアに自分の息子を無理矢理紹介する者。王に気に入られて政略結婚を狙う者もいた。

アリアも分かっているが嫌われない程度に軽く流す。

王の方は言わなくても分かるがアリアのことを一番に考えている為、間違った相手を選ぶはずがない。その前に「結婚なんぞ断じて許さ〜ん!」などと言って結婚を認めなさそうである。

パーティーは滞りなく進んでいく。何も起こらずにパーティーは楽しいままで終わるはずだった・・・

城の1番高い場所。夜の闇に黒マントがはためく。「そろそろ頃合いか」

そう言っ指を鳴らす。その音だけが辺りに響く。

パーティーも中盤に差し掛かった所それは突然にやって来た。最初はごく小さいものだったが次第に大きなものへと変事していく。

「えっ?」

アリアだけでなく客人も気付き始める。その揺れに。

「・・・また、地震？」

最近になって頻繁になりだしていた。

「そういえば・・・昨日も揺れていたな」

アリアの小さな呟き。多分、他の客人達も思ったことだろう。昨日は日が沈む頃に1度あった。

「皆様。少し揺れています。時期に収まるでしょう」

王も客人もいつもの揺れだと思いつぐに収まるだろうと考えお喋りを続ける。案の定、揺れは次第に収まっていった。天井の豪華なシャンデリアはまだ揺れていた。

しかし、今回はそれだけではなかった。収まり始めていた揺れはまた大きなものになっていく。今までのものとは比べられない程の地震。まるでこつち近づいてくるように大きくなる。

テーブルは倒れ食器類が床に落下する。シャンデリアも今まで以上に激しく揺れる。人はもう立っていることすらできない。

留めとばかりに一際大きな揺れ。地面から突き上げるような爆発が起こる。

「きゃああああー！ー！ー！ー！」

あちこちで女性客の悲鳴が上がる。爆発的な揺れがあった後も地震は続いたが徐々に小さいものになっていく。

「アーサー様、エリザベス様、ご無事ですか？」

地震が弱まったのを見極めセバスチャンが王と女王の元に辿り着く。

「ええ、大丈夫よ」

「私は大丈夫だ！それよりもアリアを！」

2人は自分の無事を伝えるとすぐに娘を気遣う。

「アリアンティア様ー！ご無事ですかー！」

セバスチャンは辺りを確認しながらアリアの名前を呼ぶ。

「爺ー！わたしは大丈夫ー！」

アリアがセバスチャンの方に手を振る。人に流されて壁際までい

き長いカーテンにしがみついていた。

アリアの無事に王も女王も老執事も周りの客人達も安堵の息が出  
ていた。

少なからず城も町も被害は出ている。そう思い町の様子をガラス  
越しに見てみる。

やはり町の方は崩れている家がある。火災も所々で黒い煙を上げ  
ている。

「えっ!?!?・・・なに、あれ・・・」

そして、アリアは見てしまう。黒煙立ち込めるその向こうに巨大  
な影を。揺れはなおも続いている。その揺れは不思議と城に・・・  
アリアに近付いて来るようだった。

## アリアの魔力（後書き）

不快な思いをした方はすみませんでした。

最後まで読んでくださった方はありがとうございます。

今後のアクセス数が気になる所です。

## 港攻防戦

日が沈みかけ辺りは鮮やかなオレンジになっている。海はそんな美しい光景をそのままに映し出している。港を少し離れた草原では先程から騎士団と謎の集団との戦いが繰り広げられている。

部隊長のアラドが到着した時には港を飛び出し戦場を草原へと変えていた。

港から攻めてきた集団はそれほどではなく騎士達で十分であったが黒フード・・・シャドウはそうはいかなかった。シャドウは魔物を召喚して戦わせている。

アラドが来るまでは押される一方であったが、今は何とか進撃を抑えている。それがいつまで持つか。

「さすが部隊長さんだね。僕のブラックベアを一人で相手しているんだから」

部隊長 アラドに感心してしまうシャドウ。

「それに比べてこっちは・・・はあ、ちよつとおじさん達！もうちよつと頑張つてよね！」

アラドと自分の協力者達を見比べてため息が自然と出る。

「うるせー、ガキがっ！お前は黙ってソイツ相手してる！」

入港した時、シャドウの隣にいた親分が叫ぶ。親分も親分で騎士の相手で話している状態ではない。

「チエツ、ちよつと言っただけじゃないか。・・・それにすぐこっちがやられちゃ〜意味ないんだよね」

最後の方は小声で。この本当の作戦を知っているのは自分とルナ、セルシウスのみである。

「まっ、僕が頑張るしかないか」

そう言っただけの目の前の相手、アラドに集中する。

「まだまだ終わらないよー！ここからが本番だー！」

自然と口元が緩む。

日が沈んでもなお続けられている。

「くっ、何なんだ！あのモンスターは」

長剣を携えたアラド。相手はただのベアではない。

2メートルの身長に黒い毛並み。両手には3本の爪。爪というより巨大な剣だ。

「アイツが闇の力で強化しているのか」

アラドの言っていることは当たっていた。ちなみにマリクが戦った強化型リザードマンもシャドウの闇属性で強化したものだ。

悠長に考えている暇もなく背後から横に一閃。アラドはしゃがんで一閃をかわすも斬撃は終わらない。

斬撃を浴びせるのはブラックベアではない。幼い女の子。大きな目のマントに自分よりも巨大な鎌<sup>かま</sup>。頭には髑髏<sup>どくろ</sup>の仮面を少しずらして乗っている。シャドウが新たに召喚した者。

自分よりも大きな鎌を自由自在に操る。

深紅の刀身がアラドを襲う。

長剣で大鎌の軌道を変え、防ぐ。だが、アラドはどんどん後退していく。

刹那、後ろに気配を感じる。ブラックベアだ。

ブラックベアは腕振り上げ渾身の一撃を叩きつける。

「くっ！」

地面は大きくえぐられたがアラドは跳んで回避する。

「甘いねっ。これでもくらえ！《デモンズランス》」

紫のオーラ。闇属性の魔法。

アラドの着地を狙って放った闇の槍。寸分狂うことなくアラドに向かう。

「何っ！？」

着地を狙われたためもう一度跳んでも間に合わない。アラドは長剣で闇の槍を迎え撃つ。

そして、激突する。土埃が舞い振り飛ばされたアラドが姿を現す。  
「やつりーっい！」

当たったことに対しての喜びの声。

「遊んでいるのか!？」

そうシャドウの声音はゲームをやっている感覚だった。

「くそっ！」

アラドが立ち上がるうとした瞬間に地面が揺れる。

「何っ!？」

「う、うわっつと！」

アラドは片膝つき耐える。シャドウは片足でケンケンつとバランスをとっている。周りで戦っていた騎士も謎の集団も突然の揺れに戦い処ではない。そして、下から突き上げる巨大な揺れが城の方からする。

「うおつと!あつちも始まったか」

あまりにも大きな揺れでシャドウは堪らず空中に逃げる。視線は城に向けられている。

アラドも視線を城に向け驚きの表情になる。アラドの目には所々から黒煙を上げる王都。

「城が!アーサー王!」

アラドは振り返り城へと向かおうとするが

「おつと、行かせないよ。まだまだ僕と遊んでもらうよ、アラドさん」

いつの間にかシャドウが回り込んでいた。両脇にはブラックベアと死神少女が控えている。シャドウは明らかに楽しんでいる。しかし、実力はある。

「コイツを何とかしない限り俺は城へは行けないか」

一瞬、城を見れもすぐに視線を戻す。王都に残る仲間を信じて。自分は目の前の相手に集中する。

「なら・・・倒して進むのみ!」

アラドは気合いの掛け声とともにシャドウに突っ込む。

本来の自分の役目は城を、王を守ること。その役目を果たせない  
ジレンマ。城の状況も気になり焦りもあるが自分は目の前の相手を  
倒さない限り城へは進めない。なら力付くでもなんで進む。そう心  
に強く誓い突き進む。

## 港攻防戦（後書き）

アラド対シャドウ戦を軽く入れました。

## 山の向こうで

昨日のことは戻ってからルドルフに報告した。

「何!? ドラゴンだと!?!」

クレイアは山でドラゴンと戦ったこと話した。隣にはアルとロンもいる。

「それで力は使ったのか?」

クレイアにだけ聞こえるように聞く。

「・・・はい」

「使ったのか!?!」

「あつ、でも魔力変換だけ・・・」

「そう言う問題じゃないだろ! 使ったことには変わらないだろ! はあ、と大きなため息を一つ。

「俺もない所で力を使ってまた暴走したらどうする」

「すみません・・・」

クレイアは俯いて何も言えなくなってしまふ。

「親父! 兄ちゃんを怒らないでくれよ!」

「うん! クレイア兄ちゃんは俺達を守るために戦ってくれたんだ!」

アルとロンが弁解してくれる。

「しかしだなあ・・・」

「しかしでもなんでもねーよ!」

「クレイア兄ちゃんが戦ってくれなかったら俺達はここには帰って来れなかった」

2人の眼差しは自分の父親に向けられている。ぶれること真っ直ぐに。

「わかったよ。もう怒らない」

「「やったー!」」

2人の思いは父に届いたようだ。

「嬉しいのは分かったから2人はご飯食べてなさい。母さんが待っている」

「はい！」

2人は返事をし家の中へと走っていった。

2人が家に入ったのを確認し

「いいか、クレイア。今回は大目に見よう。だが、次はあんな無茶はするな。いいな」

「・・・はい」

「また、今日みないな者が襲って来たら逃げろ」

「はい・・・」

「もし、力を使うがある時は俺が傍にいる時にしろ。でなければ誰もお前を止められない。いいな」

父が子に言い聞かせるようにしっかりと。

「・・・はい、わかりました。・・・すみません、ルドルフさん」  
「分かればいいさ。それよりお前も腹が減っただろ。食べていきなさい」

「・・・はい！ありがとうございます」

クレイアとルドルフも家へと向かう。暖かいご飯と家族が待つ家に。

いつもど通りの朝を迎え顔を洗い眠気を覚ます。

「そういえば、山の搜索どうするのかルドルフさんに聞くの忘れてたな」

ルドルフにお説教をくらったので聞きづらくなりそのままになってしまった。

「後で相談しに行こう」

クレイアは普段着に着替える。着替えている最中に気付いたことだがもうお昼になるところだった。久し振りの戦闘と魔力消費で疲れていたのかもしれない。

軽く朝食 クレイアにとってのを取り終わる。昼食を食べている時に来られるのは迷惑だと思わずらして行く。

「こんにちわ。クレイアです」

「はい！どうぞー！」

ローザの声が帰ってきたので家に入れてもらう。

「あ、ルドルフさんいますか？」

「あ、ちょうど今旦那にお客さんが来ててね。お茶でも飲んで待ってる？」

「いえ、また後で来ます」

「そうお？ごめんなさいね」

一礼し玄関を出る。微かにルドルフ達の話しが聞こえてくる。

「・・・なのでルドルフ様にもお声がかかる可能性がありますのでその時はよろしくお願いします」

何処か緊迫した雰囲気を醸し出している。

「分かった。・・・しかし、ソイツは何物なのだ？」

「それが分かっておりません。襲撃を受けた港の方にはアラド様が向かわれた為、問題は無いかと思われまます」

「そうか。アラドが向かったなら大丈夫だろう。城の方も問題無いか？」

「はい。アリアンティア様を狙った者達もあらかじめ捕まえております。兵もいつもの倍で警備をしています。問題無いかと」

「まあ、城にはマリクもいるなら大丈夫だろう。分かった」

「ルドルフ様。奴の監視引き続きお願いします。それでは」

「わかってるよ・・・」

ため息混じりにルドルフの悲しい呟きだけが残った。

クレイアは家に帰るとすぐに剣を手にする。

「剣なんて持ってどうした？」

急に声をかけられ身体が一度ビクつき動きが止まる。右手に剣を掴んだまま声が聞こえた方に頭と視線ををゆつくりと向ける。

家の扉は開けられていて腕を組み壁に背を預けていた・・・

「・・・ルドルフさん・・・」

ルドルフがいた。ルドルフは昨日よりも険しい顔つきになっている。

「・・・どこかに行くのか？クレイア」

「・・・」

クレイアは黙るのみ。

「クレイア一旦、剣を置くんだけ」

「・・・」

「クレイア！」

言葉が荒くなるルドルフ。

「さつきのお客さん、王都の騎士でしょ」

クレイアも自然といつも声のトーンが低くなる。

「・・・」

今度はルドルフの方が沈黙する。

「王都の騎士がルドルフさんにまで話しを持ってきたってことは城で良くないことがあったってことですよ」

客人はおそらく王都の騎士。

「・・・」

「違いますか？・・・前騎士団長 ルドルフさん」

ルドルフは以前、騎士団に所属しており騎士団長まで登りつめた實力を持つ。そのルドルフに話しが入ったと言うことは相当悪い知らせだろうことは明白だった。

何か良くない事がおこり前騎士団長のルドルフさんの力が必要になっただらう。

「・・・」

「・・・」

この空間を支配する重い沈黙。沈黙が続けば続く程クレイアの不

安は徐々に大きく膨れ上がっていく。

「・・・はあく・・・やはり聞いていたか」 意外にも先に言葉を発したのはルドルフだった。クレイアが家に来ていたことは気配で分かっていた。

「いえ。微かに話し声はしましたがよくは聞こえませんでした。エアバイクがあつたんでもしかしたらつて思つて」

エアバイクとは魔力を動力源とした物。しかし、車輪は無くそのままバイクの胴体があるのみ。空を飛ぶバイクのため車輪がいらない。スピードも本気を出せば時速200キロで走れることもできる。

エアバイクはそんなに簡単に作ることもできない。手に入れるにしても大金が必要だ。

前騎士団長のルドルフに相談してきたこと。そして、エアバイクを所持できるほどの財力。

アーサー王しかない。この大陸の中心都市である王都ならば説明がつく。

それがクレイアの考えた答えだった。

「・・・そうか」

実際の所、クレイアの考えは当たっていた。知っていて真実を隠してはさらにクレイアの考えを悪い方にいかせてしまうと考えるルドルフは仕方なく今の現状をクレイアに説明することにした。

「俺がさっきつけた報告によれば城の方は午前中のパレード中にアリアンティア様を狙った攻撃があつたがあらかた犯人は捕まえたそうだ。そして今現在、港で謎の集団に襲撃を受けているそうだ」  
アリアが狙われたと言うフレーズに反応するもルドルフが手で静止させ続ける。

「だからもしもの時は俺にも声が掛かるからしばらくは待機するようにつてことだ」

「待機ですか・・・」

「そうだ。待機だ」

つまりルドルフはドラゴンの山の搜索には行けないということ。

ならクレイアも行けない。

「昨日のドラゴンのことどうするんですか」

「今は無理だ。俺はここを離れることはできない」

「でも明らかにおかしいですよ！ドラゴンがああ山にいたのは！」

「ああ、でもたまたまかもしれない」

「そうじゃないかもしれない！不安要素があるなら取り除いた方がいい！」

クレイアの言っていることもわかる。しかし、

「これは命令だ。お前も大人しくここにいろ！」

「嫌だと言ったら」

「一歩も引こうとしない2人。」

「お前を1人で行かせることはできない」

「知ってますよ。それが騎士団を抜けた時に受けた最後の命令ですからね」

ルドルフが騎士団を抜ける代わりに受けた命令がクレイアを監視するということだった。クレイアの力を恐れたこと。

クレイアの目が鋭くなる。何を言っても変わらないと思い行動に出る。

（抜いてやる！）

クレイアは足に魔力を溜めて一気に爆発される。出口は1つ。そこに一直線に向かう。

（よしっ！）

外へ飛び出すクレイア。眩しい太陽の光が目に入るもすぐに暗転へと変わってします。

「うっ」

何も分からないままその一言を残しクレイアの意識は無くなっていった。

目が覚めると辺りは暗かった。小さな窓から伸びる月明かりで夜

なのだと知ることができる。

「いつつ！」

動こうとするも腹に激痛が走り顔が歪む。切られてはいない。多分、ルドルフにやられたものだろう。

何となくこうなることは分かっていた。仮にも元騎士団長である。クレイアが勝てるはずがない。しかし、抑えることができなかった。たとえやられると分かっていたとしても。ほぼ0に近い可能性だったとしても。クレイアは引くことはできなかった。

そうこうしている内に目が暗闇になれてくる。

空間の壁にクワや木箱が置かれている。殆どが古い物。少し動くだけで埃が舞ってしまう。綺麗とは言えない場所だった。

空いている空間は人が2、3人は寝転がれるくらいのスペースはある。

恐らく小屋。物置として使われている所だろう。

腹の痛みに耐えながらも立ち上がる。唯一、外が確認できる窓へと歩を進めていく。

「ここは・・・」

限られた視界で外の状況を得る。見慣れた風景。

「やっぱりルドルフさんの家の物置か」

その後、駄目元で物置の扉に手をかけるが弾かれる。出られないようにシールドが張ってあるようだ。

「やっぱりダメか」

当たり前といえば当たり前である。

どうにかしようと思うも肝心な剣がない。魔力は少しならコントロールできるがはたしてこの少量の魔力で突破できるか。結局の所、何もできずその場にしゃがみ込んでしまう。

今の自分の状況を見て情けなく思うクレイア。

「くそっ！」

次第にその情けなさは苛立ちへと変わり自然と口からこぼれ落ちる。何か良くないことが起こっているのに何もできない自分。

時間だけが無情に過ぎるだけ。時間が進めば進むだけクレイアの苛立ちと焦りだけがつのつていった。

そして時間は重なる。アルバス王国で起きていることがこの村でも始まってしまふ。

「また地震？」

始めは極小さい揺れ。それが次第になる。王都からここまでは山2つ分くらい離れている為、立っていられないようなものでもない。揺れの大きさは対したことではないが揺れの長さが尋常ではない。揺れも収まってきたところ遠くで爆発音が辺りに響き渡る。あまりのことに村の皆が外に飛び出す。

「何だ！？今の！」

「何があつたの？」

クレイアも窓に駆け寄る。すると、山の向こうで黒煙が上がっている。この方角は

「・・・王都の方か！？」

クレイアの焦りが増す。

「なっ！？」

そんなクレイアの目にまたも信じられないものが目に飛び込んでくる。

夜空を王都の方に向かっていく無数の影。人ではない。もっと巨大なもの。闇の中で見える輪郭。後ろに伸びる長い尻尾。そして闇夜を切り裂く翼。

「・・・ドラゴン！？」

クレイアはただただ王都に向かう影を見ていることしかできなかった。

「・・・アリア！」

クレイアの眩きが冷え切った空間にポツリと落ちた。

## 山の向い方で（後書き）

みんなと同じ時系列にしようと思いましたがちょっと長くなっちゃいました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1859z/>

---

黒きナイト

2012年1月14日12時50分発行